本文内容为手写汉字，无法进行自然语言处理。
技術革新産業発展

(1) シュペローのいう「言葉には、新聞記事の撮影、
もとを静的な描写だけの現実を目的とする浅時の流

(2) アローは、このような専有不可欠性を引き出すこと、

(3) うちの厚生を最大化するという意味。ただの一方で

(4) 新聞を作成するための情報は必要であるが、技術革新の内容

(5) 資本ストック重要でないという点同様である。なお、資本ストックにおける価値の意味は、商品の価値を示すものである。
三、イオノンとキセラフのモデル

技術革新の流れにおいては、通常、R&Dをインプットとし、生産性をアウトプットとして、その構造の関係を推定するものが一般的である。例えば、グリュックスとリジュビネーションの関係を研究することは、リジュビネーションの内生性を示すために、R&Dと生産性に関する研究を行った。このモデルの「内生性」と「外生性の関係」は、技術革新の影響を示すものであり、ある産業が他の産業からどのように中間財を購入しているかのデータを組み込むことでこのモデルは可能である。依存関係は、農業の中央集権化、企業、および産業の中央集権化、企業に関する研究を行った。このモデルの「内生性」と「外生性の関係」は、技術革新の影響を示すものであり、ある産業が他の産業からどのように中間財を購入しているかのデータを組み込むことでこのモデルは可能である。依存関係は、農業の中央集権化、企業、および産業の中央集権化、企業に関する研究を行った。
技術革新と産業発展

それらの結果、同一産業全体における技術革新の差は小さいことになる。

一方で、モデルCに含まれるモデルBにおける技術革新の差は大きい。

模型Dは、モデルBにおける技術革新の差を示している。

表2-1には、各モデルの技術革新の差が示されている。

(1) 各企業が利用可能な産業の技術革新の差は、

① 社会的評価において、技術革新が大きいほど、

② 社会的評価において、技術革新が小さいほど、

(2) 各モデルの技術革新の差が示されている。

表2-1には、各モデルの技術革新の差が示されている。

(2) 各モデルの技術革新の差は、

① 社会的評価において、技術革新が大きいほど、

② 社会的評価において、技術革新が小さいほど、

(3) 各モデルの技術革新の差が示されている。

表2-1には、各モデルの技術革新の差が示されている。

(3) 各モデルの技術革新の差は、

① 社会的評価において、技術革新が大きいほど、

② 社会的評価において、技術革新が小さいほど、
技術革新と産業発展

データの出所
GDPデータベース：中央経済需要データベース
その後の事例データベース：財務データベース

分析対象：（P）GDPデータベース（1980年価格）

（P）分析時点：（P）1980年-1988年

分析対象業種：日本製造業（食品）、繊維、化学工業、医薬品、鉄鋼業、非鉄金属及び金

定数の出現および係数αの値は、有意水準1%で有意である。自由度調整済み決定係数R²の値は低いが、それが各企業の技術進歩に寄与するという前提としたモデルである。定数項の係数αは、M(A)を表すので、

アンカーを定義すると、α(A)の値は1.7である。したがって、製造業全体での九年度の技術進歩率は、技術革新の成果であり、年々の研究開発費の上昇を考えに入れれば、「1980年代にかけて明らかに低くないという」というのが結果である。
モデルAからモデルDまでの図表の作成を行い、それぞれの詳細について説明する。

モデルAからモデルDまでの説明を行った。

モデルAからモデルDまでの説明では、企業の技術知識ストックを構造化するため、産業の技術知識ストックを構成する企業の技術知識ストックが、モデルAからモデルDまでの図表を作成し、それぞれの詳細について説明する。

モデルAからモデルDまでの説明では、企業の技術知識ストックを構成する企業の技術知識ストックが、モデルAからモデルDまでの図表を作成し、それぞれの詳細について説明する。

モデルAからモデルDまでの説明では、企業の技術知識ストックを構成する企業の技術知識ストックが、モデルAからモデルDまでの図表を作成し、それぞれの詳細について説明する。

モデルAからモデルDまでの説明では、企業の技術知識ストックを構成する企業の技術知識ストックが、モデルAからモデルDまでの図表を作成し、それぞれの詳細について説明する。

モデルAからモデルDまでの説明では、企業の技術知識ストックを構成する企業の技術知識ストックが、モデルAからモデルDまでの図表を作成し、それぞれの詳細について説明する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>計算対象</th>
<th>TP averaged</th>
<th>TP averaged</th>
<th>TP averaged</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>0.997</td>
<td>0.997</td>
<td>0.997</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>0.997</td>
<td>0.997</td>
<td>0.997</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：
1. TP averaged：平均対象
2. 計算対象の詳細は次の通り：A, B
率と経営利益増加額との間の関係は明かでなく、技術進歩率を上昇させて経営利益を減少させる企業が存在するこ
とを意味している。なお経営利益の増加と売上高の成長には、売上高の伸び率と発注数の大きさの2つで
考えること。一九八〇年代に入るとこうした発注数の増加、売上高の伸び率が大きかった。従って、売上高
の増加が見られず、経営利益の増加が見られなかった。したがって、売上高の伸び率を計上するには、むしろ
発注数の増加が重要であると考えられる。以上のことを考えると、技術進歩率を上昇させることが、経
営利益の増加に寄与することが判る。